

〈研究ノート〉

自己知覚とコミュニケーションへの文化の影響*

—外国語における社会言語能力の獲得

福 地 直 子^{1**}

個人は自由意志によって動機づけされると考えられることが多い。しかし実は、個人の行動、そして言語は、社会的制約、社会集团的制約の影響を受けている。それぞれの文化では、ある一定の行動パターンが期待されるが、個人が社会的自己を発達させるようになることは、社会的行為の規範の理解から一部はきている。本稿では、「自己」という用語を、人間社会の経験の一部によって唯一無二の人間を特徴づける実態へ、学習・知覚・経験といった様々な要素を組み入れるものを指すものとして用いる。この自己は無形で、社会および他者との相互作用による要求によって絶えず変容している。それは、集団の中での相互作用の過程で出現し、社会の中における各人の役割や地位を具現する。

自己は、人を唯一無二の存在にし、社会環境に応じて変わり易いものにする。自己は、社会的相互作用の基礎であり、社会的現実の産物である。我々は他者との相互作用を、長年の間に身につけた態度や偏見、先入観の産物である我々独自の見方で行う。他者の行動の解釈を伴う社会的知覚は、我々が何者で、何になるのか、そして自分自身をどう定義するかにおいて重要な要素となる。社会的自己の重要な部分、ひいては社会的アイデンティティはこのような基礎を内包している。

対人コミュニケーションは、他者との相互作用における自己表現の観点から見ることができる。コミュニケーション様式は自己の文化的概念の影響を受け、自己の文化的概念はコミュニケーション様式に影響を与えられ考えられる。本稿は、自己における文化的相違はコミュニケーションに

よって表され、規定され、形成されるという前提に基づいている。自己およびコミュニケーションは相互に関係しあい、文化的に形成された自己は、あるチャネルを通してある一定のコミュニケーション様式で定義され、表され、ひいては自己を補強したり再構成したりする。つまり、自己はそれ自身がまさにコミュニケーションの過程なのである。

Triandis (1988) は、コミュニケーションに関する研究において、個人主義と集団主義について多くのことを議論し、研究してきている。このような文化に関する研究により、自己知覚に対する自国文化の影響が明らかにされている。そこで、「自己に対する文化の影響は、どの程度、コミュニケーション様式に影響を与える支配力のある特徴なのだろうか。言語はどの程度、我々の思考を制御し、言動に影響を与えるのであろうか。」といった疑問がわいてくる。

個人主義的傾向、集団主義的傾向の度合いを決定する大きな要因は、年齢であることを示す研究がいくつかある。Triandis、Bontempo、Villarealら (1988) による研究では、日本人学生は、集団主義の程度が高い彼らの両親よりも個人主義の程度が高い、という結果が得られている。また、Gudykunst (1993) は、年齢差はアメリカ人、日本人という国民性の違いよりも大きいと主張している。これらの知見は、自己の境界は、年齢が低いときには比較的柔軟であることを示唆している。また、Gudykunst による子育ての比較研究は、相互依存性または独立性のどちらを重視するかが、個人主義的文化か集団主義的文化になるか

*キーワード：文化、自己知覚、コミュニケーション

**関西学院大学社会学部専任講師

1) 本稿は「言語と文化」2号執筆論文を和訳したものである。

を決める要因となることを示している (Gudykunst, 1993)。個人主義的文化 (英語) では、独立性、つまり自己実現を奨励している。それでは、外国語においては、個人主義的傾向と集団主義的傾向を反映する個々人の特性は、コミュニケーション様式にどのような影響を与えるのだろうか。本稿では、外国語に触れることによる自己知覚に対する文化的インパクト、および外国語におけるコミュニケーション様式に影響を与えると思われる個人的特性について詳述する。

〈言語文化、自己知覚、およびコミュニケーション様式〉

Lebra (1993) は、英語の「I」に相当する日本語は存在しないと指摘する。さまざまな社会的状況、話者の性別、年齢といった社会的属性によって、自己を指すのに異なる言葉が使われる。Lebra は、日本人女性とアメリカ人女性とのインタビューの研究を行った。それによると、日本人は親族関係については多くを語るが、自分自身についてはほとんど語らない。これと対照的に、アメリカ人女性は親族関係についてはほとんど何も語らず、話すことといえば、ほとんどが自分自身のことだけだったことが例証されている。

Markus and Kitayama (1991) による一連の研究からは、興味深い結果が得られている。それは、自己増強した偏見や自己本位な偏見を示す傾向のある個人主義者よりも集団主義者の方が、いかに現実的な自己知覚を示し偏見が少ないかを示している。彼らの研究の結果は、アメリカ人は成功に影響されやすく、成功によって自尊心を高めると考えられることを示している。これとは反対に、Kashima and Triandis (1986) は、日本人は他の文化集団よりも、失敗によって自己評価を下げる人が多いと考えられることを発見している。

さらに、Triandis は、異質性の高い文化 (緩い) と同質性の高い文化 (厳しい) には大きな文化的傾向があると主張する (Triandis, 1995)。緩い文化 (アメリカ) では、さまざまな行動を試してみたり、大胆におもいきったことをする自由がある。厳しい文化 (日本) では、物事を正しく行うことが強調され、先例に習う。人々は批判さ

れることを恐れ、失敗によって傷つくので失敗を重視する。

さらに、自己知覚における丁寧さ、回避、用心深さに対する日本人の傾向は決定的な自己評価の低さにつながるということが Radford ら (1993) の研究により示されている。自己概念に関する研究は、自己評価が低いと、自己概念も不明確になることを明らかにしている。このことは自信にも影響を与える。日本人が規範から逸脱することに敏感なことや、自己知覚に柔軟性がない傾向は、外国語のコミュニケーション様式の新しい形態を獲得する際に、一歩前に進むことが困難であることを示唆している。

自己知覚はコミュニケーション様式に明らかに強いインパクトを与える。前述の Radford らの自己知覚に関する研究は、間接的表現、受動性といった日本人の自己知覚に対する選好を示唆している。また、コミュニケーションは、自己知覚の本質を反映する。集団主義者は、会話中に相手の心を読み、間接的にメッセージを伝え、会話の中ではのめかしや示唆的な声の調子を使う傾向がある。沈黙は、集団主義的文化においては美德とされるが、個人主義者にとっては当惑するものである (Iwao & Triandis, 1993)。「I」よりも「We」を多用する傾向は、コミュニケーション様式に強い影響を与える。個人主義者は明瞭な発言を尊重するが、集団主義者はコミュニケーションにおいて内集団の感情を重視する。集団主義者は説得する際に義務や義理を感じるが、個人主義者は説得するような発言をする際に、個人にとって脅威となる好ましくない結果を重視する (Gudykunst, 1993)。

いくつかの先行研究によって、年令の高い子供と年令の低い子供では、言語と思考の結び付け方に違いがあることが明らかになっている。年令の高いモノリンガルの日本人の子供は、概念的な発達と母国語である日本語のあいだの密接な関係に慣れるまでに何年もかかっている。もっと年をとってから始めた第二外国語は、概念の発達に付随する関係を持ち、母国語に干渉することもある。また、年令の高い児童も年令の低い児童と同様、第一言語と第二言語を思考過程で用いることが示されている (Brown, 1990)。明らかに、言

語を第二言語として学ぶか、外国語として学ぶかが、自己の知覚に大きな影響を及ぼすと思われる。つまり、たとえばアメリカで、英語を第二言語として勉強しているモノリンガルのスペイン人は、第二言語として英語を習得するので、英語文化をより覚え身につけやすいと考えられる。しかし、日本に住んで英語を外国語として学んでいるモノリンガルの日本人は、文化的にかなり異なる環境の中にいる。そのため、第二言語として英語を勉強しているスペイン人と比べると、英語の文化的なコミュニケーション様式、つまり英語の自己をあまり身につけられないと考えられる。もちろん、例外はあるだろうが、外国語として英語を学んでいる多くの生徒に、同様のことが言えるであろう。

本稿では、日本語で行われる授業において外国語として英語を習得した日本人大学生から集めたサンプルによって、自己の概念を例証する。

〈方法〉

本研究では、2つの項目に主眼をおく12項目から成るアンケートを用い、生徒の第一言語と第二言語の言語表現および非言語表現における違いを探った。1つの文化から他文化への転移についても考察する。しかし、本稿は、言語と感情、あるいは言語と自己の関係について尋ねた、以下の2つの質問に主に基づいている。

1. あなたの自己に対する感覚は、2か国語、2つの文化を経験することで、どのように形成され、あるいは変わりましたか。それぞれの文化様式と言語はあなたの人格 (**who you are**) をどのように形づくりましたか。
2. 自分自身をよりうまく、楽に表現でき、自己表現のニーズを満たすのはどちらの言語ですか。

アンケートの対象は、関西学院大学の1年生110名である。約20%の生徒が海外で最高2年間過ごした経験があり、10%が2年以上海外で過ごした経験があった。また、学生の大多数が日本語で英語の授業を受けていた。

〈外国語の文化への接触と自己知覚〉

ある日本の大学の授業で事例サンプルを集めた

が、その結果、ほとんどの場合で、外国語学習による生徒の自己知覚への直接的な文化の影響はあまりみられなかった。

110名の学生から、「自己やアイデンティティに対するあなたの感覚は、あなたの言語、および文化的経験によってどのように形成されましたか。また、言語学習によって知った言語と文化様式はあなたの人格 (**who you are**) をどのように形づくりましたか。」という質問への回答が得られた。調査対象となった110名のうち、29名が2か国語以上に触れることによる自己知覚への影響は意識していないと答えた。これは、全対象者の約30%に相当する。しかし、自己報告をより詳細に見てみると興味深いことがわかった。この質問は、言語と外国語の文化が生徒の自己知覚にどのような影響を及ぼすかを探るためのものだったのだが、自己知覚における変化は、簡単な影響から全体的な自己評価 (**global self-esteem**) における変化、および自己表現における変化まで多岐にわたっていた。外国語に触れることは自己知覚に何の影響もないと答えた生徒の大半が、英語の勉強は義務的なもので大学に入る為の手段にすぎないと考えていた。言語学習にもっと肯定的な見方をしていた生徒は (留学経験のない生徒でさえ)、より前向きな回答をしていた。最も多かった回答は、外国語を勉強することは、自分の視野を広げ、日本に特有な考え方以外の何かを知る機会を与えてくれる、というものであった。外国語学習は、生徒に自国の文化を再評価し、新たな理解を深める機会を与えていた。また、言語学習は明らかに、他文化に対する理解を深め、感じ方や考え方が違うことを気づかせるのに役立っていた。多くの生徒が、他文化の魅力的な特質を、自己表現、自己アピールの手段として取り入れてみたいと報告していた。表1に、自己報告による自己知覚に対する肯定的、否定的インパクトの概略を示す。

この結果から、自己の境界が弱いほど、新しい文化様式を自己表現、自己アピールに取り入れることが可能なことがわかる。これらのデータから、言語学習に肯定的な生徒は、対象言語に代表的な文化様式に適応しやすく、言語学習に比較的否定的な生徒は、母国語に代表的な文化様式から離れられない傾向があることがわかる。明らかに

表 1 他言語への接触および自己知覚における変化

	肯定的	否定的
接触が 多い	率直になる 自己アピールに関心がある 社交的で活動的になる 直接的表現を使う必要を感じようになる 自分に自信をもつようになる 表現力が豊かになる 新しい自己を意識するようになる 他の考え方に気づくようになる 古い思考・行動様式をやめる必要を感じるようになる	自制的になる 引込み思案で寡黙になる 間接的表現を使うようになる 優柔不断になる 自意識過剰になる 臆病になる 自己アピールに消極的になる 感情を隠そうとするようになる 周りに合わせようとするようになる
接触が 少ない	快活になる 思考が柔軟になる 実際的になる 年齢差を気にしなくなる	

否定的な自己知覚は、言語産出に強く影響を及ぼし、手段として英語を学ぶといった道具的動機づけによって影響を受けることが多い。

生徒からの一般的な報告に加えて、他言語の文化に触れることによるインパクトと自己知覚における変化をはっきりと示唆する興味深い回答がいくつか得られたので、表 2 に示す。

これらの事例は、言語が自分自身についての感じ方にどのような影響を与えるかを例証している。また、母国語の文化が我々の考え方や感情の表現方法にどれほど強い影響を与えるかについても示唆している。新しい言語の文化に触れることは、客観的な考え方を身につけ、我々の思考や感情の表現方法に対する母国語の影響を再評価する

のに役立つと思われる。そのため、最終的には、様々な言語の文化の特徴を、我々が新しく発達させた思考と表現の自己レパートリーの中に組み入れることが可能になる。

海外生活が 2 年未満の学生(全回答者の約 20%)からの回答を、2 年以上海外生活がある学生と簡単に比較してみると注目に値する結果が観察された。要約すると、このグループの学生達は、外国語である英語を使っているときに、自分自身に次のような特徴があることがわかっていった。1) ジェスチャーやボディランゲージを多く使う 2) 顔の表情や表現力が豊かになる 3) 感情表現が増える 4) 誇張した発言が多くなる 5) 声のトーンが高くなる 6) 主語を意識して使う 7) はっきりと

表 2 自己知覚の変化に対する回答例

自己知覚における肯定的な回答

英語は、私の性格や個性を引き出してくれた。また、自分に自信を持てるようになった。自分の考えをしっかりと持ち、意見として表現できるようになった。また、他人の意見に流されることなく、自分で考えて行動できる一人になった。
他言語を学ぶことで、自分と異なる考え方を受け入れることができるようになった。思考が柔軟になったことが、異文化に触れることで得られた貴重な財産の一つだ。
私は優柔不断で、間接的な表現を使う方が好きで、イエス、ノーをはっきり言うのを避ける傾向がある。英語の勉強は、この古い習慣を克服するのに役立っている。
私は、日本語を話すときと英語を話すときでは明らかに性格が変わる。
私は、おおらかな性格を英語から、他人への配慮を日本語から学びました。英語を学んだおかげで物事を客観的に見ることができるようになった。
英語ではボディランゲージが大げさになるため、英語で話すと自分が大きくなったように感じる。

自己知覚における否定的回答

日本語の発話様式に慣れているので、断定的な言い方を避け、曖昧にぼかした表現をするようになった。私は間接的な言い方が好きだし、イエス、ノーをはっきりと言わない方が好きだ。私の優柔不断な性格は、日本語に適應することによって影響を受けているのかもしれない。

日本語によって、私は温和でおとなしい人間になった。これには、良い面も悪い面もある。私は、自分の感情をストレートに表せない。

英語は日本語よりも正直なようだし、メッセージもはっきりしているし、本音と建前が一致している。一方、日本語は何を伝えたいのかははっきりせず、本音と建前が違う傾向がある。この傾向は、精神的にひずみを生じると思う。

英語を話すときも、日本の文化的傾向に頼ってしまいがちだ。自分の意見をいうのを躊躇し、その場しのぎをしようとする。

中立的回答

私は、初めて人に会うときには物怖じしてしまう引込み思案な性格である。微笑んでできるだけ同意を示そうとする。私はストレートに物を言えない。私の引込み思案な性格は、日本文化に典型的な特徴からきている。英語を勉強して得た唯一のことはボディランゲージを使うことだ。

意志表示するように努める。しかし、このグループの学生達は、感情面での違いについては特に直接的には述べていなかった。

これとは対照的に、海外生活が2年以上の学生（全回答者の約10%）は使用する言語によって感情が異なることをはっきりと示していた。日本語を使うと引込み思案になり、自制的になり、内気になり、おとなしくなり、親切になり、間接的になり、遠回しの言い方をし、謙遜する傾向があるが、英語の場合には、積極的で、率直で、攻撃的で、生意気で、大胆になる。こういった感情は、第一言語と第二言語の能力が極端に違う場合に特に目立った。

〈個人的特性と好まれるコミュニケーション様式〉

文化に特有なコミュニケーション様式を反映する個々の特性は多種多様である。本稿では、個人的特性とは、我々の自己を表しコミュニケーション様式に影響を与える個性や人格を指す。Triandis (1995) は個人的特性として、次のような特性を挙げている。自己知覚、帰属、アイデンティティと感情、認知、動機づけ、態度、規範、価値観、社会的行動、プライバシーに対する態度、コミュニケーション、対立する決断、道徳心、責任感、パーソナリティー、そして職業上の行動。本稿では、自己知覚、アイデンティティと感情、そして態度を中心に見た。これらの特性は、この考察において、特性の様々な違いが、どのように存

在し、どのように文化に特有なもので、個人主義者と集団主義者の文化をどのように反映し、英語と日本語の思考とコミュニケーション様式にみられる違いを分類する助けとなるかを示すために用いられている。それゆえ、我々が本来持っている特性を維持しようとする強い傾向は、言語習得を困難にする。

各言語には、独自の思考パターンと特定の語彙選択によって、意味に微妙な差異がある。具体的には、日本人は否定疑問文や受動的な表現を好む傾向がある。たとえば、「質問はありませんか」は「質問がありますか」と言うよりも一般的である。他にも、少し例を挙げれば、「いろいろ」、「そろそろ」、「など」、「ほど」、「ばかり」、「ばんじ」、といった言葉によってさまざまな曖昧なニュアンスが表される。「そろそろ」は“徐々に、少しずつ”といった表現をつけることで、急いで帰らなければならない状態を和らげる働きをする。こういった曖昧なニュアンスがあるため、間接的な発話行為が多くなる。日本語の会話は、聞き手の推論に非常に依存している。論理的に推論する能力は他の文化にもみられる普遍的な特徴であるが、母国語の文化から導き出される解釈は文化によって異なる。日本語によるコミュニケーションでは、自分を卑下したり、謙遜することが美德とされる。日本語のコミュニケーションの自然な発展形態はピラミッドの形（最高潮が最後にくる）で表すことができる。つまり、話の主題、最高潮に

いきつくまでに導入部や交感的コミュニケーションにかなりの時間が使われる。一方、英語によるコミュニケーションは全く逆であり、主題からはじまって、その主題を支持する内容を付け足していくという、日本語と反対のピラミッド (Kojima, 1988) の形で表される。同様に、文構造も、会話の主題に加えて、似ている。日本語は、文の最後まで結論を言わないことが多い。コミュニケーション様式におけるこの違いは、好まれるコミュニケーション様式がどのような対立を産む可能性があるかを示す。このことから、コミュニケーションエチケットについて考える必要がでてくる。

コミュニケーションエチケットに関する研究により、様々な個人的特性とコミュニケーション様式へのインパクトが明らかになっている。コミュニケーションエチケットにより、好まれるコミュニケーション様式が違ってくる。たとえば、年上の人や社会的地位、職業的地位の高い人がいるかで、日本語での会話のやりとりの文脈が決まる。接頭語や適切な動詞といった語彙の選択は、その場にふさわしい敬意を表すものが使われる。英語の場合は、様々な社会的地位や年齢の人達の間でも、上下関係をあまり気にせず、比較的自然で自発的な形で会話される。日本語の上下関係に基づいた謙虚さを好む傾向は、自己における相違につながり、コミュニケーション様式にも影響を与える。「待遇表現」とは、日本語学で用いられる概念で、話し手が、聞き手または会話の中で話題になる第三者に対して持つ心理的・社会的距離や親密度を表す様々な言語表現のことである (Ide, 1982)。こういった言語表現があるために、日本語は、「かしこまった」に対し「くだけた」、「尊敬した」に対し「親しみのある」、「丁寧な」に対し「親しい」、「謙遜した」に対し「傲慢な」、「間接的な」に対し、「率直な」といった対をなす表現によって言語にヴァリエーションを持つことができる。

日本語は控えめで謙虚な口調で話されるが、英語による発話は、これとは対照的に、積極的で率直なものである。日本語の話者は、話題になっていることに自信がある場合でも、自分の知識を話すことをためらったり、積極的に述べなかったり

する傾向がある。Bairry は、日本人は「目立たない」ことを好むが、アメリカ人は「目立つ」ことを好むと述べている (Bairry, 1967)。自己開示における相違、あるいは自己表現をするかしないかにおける違いについて報告する研究によって、英語の話者はプライバシーに自分自身を入れることに防衛的にならない？ということが示されている (Barnland, 1975)。Maynard は「社会的詰め込み (social packaging)」という言葉を造語した。この言葉は、自己を包み込むための手段である非断言的で控えめなコミュニケーション様式をとるために、視覚的にも聴覚的にも楽な形で内容を隠すという日本語の心理を指す。このことは、言語能力が、英語の場合と日本語の場合とで異なるものを指す可能性を示唆している。英語では、明確に理路整然と話す能力を指し、日本語では、微妙な言外のメッセージを送り、受け取り、予期する能力を指す。

誇大表現・誇張法は、アメリカ人の発話において生き生きとした英語表現を示す典型的な例である。「飢え死にしそうだ(お腹がすいている)」「のどが渴いて死にそうだ(ひどくのどが渴いている)」「凍え死にそうだ(とても寒い)」「燃えるほど暑い(とても暑い)」といった表現は大げさに聞こえるかもしれない。コミュニケーション様式の違いは文化間のコミュニケーションを理解にくくし、外国語の表現の文化的形態の習得とを複雑にしている。

帰納法や弁証法は、英語の話し手の多くによって使われるが、いずれにせよ質問に一つずつきちんと応えていくことが期待される。反対に、日本人は質問に直接的に答えるのはマナー違反と考え、イエス、ノーのどちらともとれるような答え方をする場合がある。最も悲惨な場合には、このために会話が終わってしまったり、対立を解決出来ないこともある。さらに、日本人は断片的な言葉やきれぎれの言葉を使う傾向が強い。これらを使うことにより、言葉に不確かな感じがでる。ポーズは、聞き手が口を挟んだり会話に加わったりするための聞き手からの反応を誘うためにある。断片的な言葉や口を挟むことを許すことはラポールを維持すると同時に、話者の自己表現に対するためらいや不確かさがあることの表れである。相づ

ちは、日本語による会話の聞き手の間によく見られる支持的フィードバックの形態の1つであり、英語の聞き手の2倍の頻度で使われる (Maynard, 1989)。価値観やコミュニケーションエチケットにおけるこのような違いによって、アメリカ人は日本人が会話をさえぎってタイミング悪く相づちを打つのをうるさいと感じ、失礼で無神経な行動と思う。反対に、日本人は、アメリカ人が相づちを打たないとそれは無関心で敵意がある証拠だと解釈する。聞き手の役割に対する態度に関する研究もまた、注目に値する結果を示している。日本語では、聞き手の役割が重視され、Clancy が指摘するように、日本語のコミュニケーションは聞き手がどれだけうまくメッセージを受け取ることができるかにかかっている (Clancy, 1986)。同時に、話者の役割は、聞き手の感情を害さないように、依頼をし、ノーと言ひ、曖昧で、遠回しで、用心深くあることを期待される。聞き手は、すばやく反応して、話者を安心させることが期待されている。一方、英語による発話では、話者の役割、つまりスムーズではっきりと自己表現することが重視される。このように言語方策は英語と日本語では非常に異なっているため、敬意・理解などの感情は、かなり異なって表現されることになる。

率直に質問する場合には、日本語では、否定的な答えよりも肯定的な答えをしやすいうちに尋ねる。質問は、合意を導くように、文の区切りごとに肯定や同意を受けるように、操作される。これは、断定的な性質または対立的な自己主張をすることもある英語の発言や質問とは対照的である。同様の傾向は、回答にも観察される。Ueda は、はっきりと「ノー」と言わなくても断りを示唆するのに日本語には16通りの言い方があると述べている (Ueda, 1972)。

沈黙やアイコンタクトを避けたり、曖昧な答え方をするのはすべて、明確な回答を避けるためのものである。また、好意や愛情も、言葉よりも行動で知ることができる。日本人は対立を避けたり、意見が衝突しないですむように話す。言語学的に言えば、日本語にも他の言語と同様に、否定的ニュアンスを表す能力はある。ただ、文化が違い、これらの様式の使われ方が違うのである。日

本語で議論する場合には、逃げ道を作るようにし、意思決定過程に関わる人の感情を感じ取る過程がある。実際、間接的な表現、他者への配慮からくる自己抑制(つまり遠慮)、曖昧さ、慎重さ、謙遜、陳謝、そして待遇表現などの多様な発話形態と日本人の行動には感情移入が根底にある (Gudykunst, 1993)。感情移入によるか弱さを受動的に表現することは、他人からの助け、他人への依存、他人からの恩を受ける原因因子としての自己の不完全さを反映している。一見して、発話におけるこういった特徴は、共感的注意を中心とする他者、自己に対する感情的影響の源泉としての他者、あるいは自己の不完全さを克服するための原因因子としての他者のインパクトを最大にし、他人中心にみえるかもしれない。同様に、受動性、因果関係は自己中心度が非常に高いことを示している。日本語のこういった心理的な開放性は英語では解釈しにくい (山下, 1986)。この問題は、言語学の分野を超えて、自己と他者という社会心理学あるいは社会環境の概念まで関係してくる。山下 (1986) は、「世界」と「社会」は多少なりとも客観的であるが、「世間」は自己中心的な観点で各自己が定義する自己の周りの心理的な世界を指すと述べている。山下による日本語の言葉と心に関する研究によれば、日本人が周りからの批判を気にするのは、自尊心に対する自己中心的な懸念と適合性に対する他者中心の感情が表裏一体となっているためである。

コミュニケーション様式がこのように違うことは、日本人が英語を学ぶ場合に、その習得過程でその文化に適応するために多大な努力が必要となることを示唆する。英語のコミュニケーション様式を獲得することは、能動的な自己表現を取り入れ、平等な機会と地位を主張し、能動的で正直な結論を導き、率直に質問・回答をし、他人の意見を積極的に批判しようとする意志や、意見に相違がある時はどちらの意見を支持するかを決め、様々な意見を取り入れようとする必要があることとなる。

要するに、英語のコミュニケーション様式を獲得するには、全く新しいコミュニケーション様式を身につけ、抑制を解く能力あるいは進んでしようとする意志を必要とする。2つの異なる文

化的なコミュニケーション様式には、個人主義と集団主義、自己中心と他者中心、平等主義者と階級主義、対立・不同意と調和・同意、異質と同質、普遍性と独自性などの多くの対照が導出される。しかし、本研究の目的は対照を導出するのではなく、それはそれで認めた上で、対立をなくすためにコミュニケーション様式と好まれるパターンを観察することである。そのため、本稿では、排除的な2分法は用いていない。

〈個人的属性とコミュニケーション様式〉

英語と日本語のどちらの言語を好むかについて、英語を外国語として学ぶ学生被験者120名に尋ねた。予想通り、母国語である日本語の方が好きだと回答が大多数を占めた。効果的に自己を表現できるという理由から、81.7%が日本語の方を好み、18.3%が英語の方を好んでいた。日本語の方を好むと回答した生徒のうち、その理由として多かったものは、「日本に住んでいて日本語を使うことに慣れているから」「自己表現が苦手だから」「はっきりと物を言えないから」「曖昧な表現の方が好きだから」というものであった。一方、日本で英語を勉強した対象となった学生の20%近くが英語で自己表現するほうが好きだと回答していたことは興味深い。英語の方が好きだと答えた者のうち、その理由として多かったのは、「ボディーランゲージが豊富」「敬語がない」「率直に表現できる」「発話が明確」「自分のパーソナリ

ティにあっている」「肯定的で快活になることができる」という回答が多かった。また、生徒が魅力的だと思う言語の性質も、注目に値する。日本語の方を好む生徒は日本語の敬語、豊かな文化、複雑さ、抽象性、意味の微妙なニュアンス、礼儀正しさ、結論を最後までいわないこと、といった点を高く評価していた。英語の方を好む生徒は、英語の率直さ、敬語がないこと、直接的表現、正直で偽りのないこと、簡潔さ、ボディーランゲージが豊富、肯定的な印象といった特徴を高く評価していた。

「どんな性質（個性、性格）が自分の選択に影響を与えていますか」という質問への回答では、どちらの言語を好むかは、個性（personal style）、性格（personal attributes）に強く影響されることが分かった。表3にその対照を示す。このデータからは、日本語に対する強いあるいは絶対的な選好を示した生徒の中には、自民族中心主義の傾向が表れていると思われるが、彼らは英語が生活していく上で必要ない環境にいるため、当然であろう。日本語の方を好むもう一つの理由は、自分の考えをはっきりと言えないので、遠回りで曖昧な言い方の方を好むというものだった。

表4は、性格（personal attributes）と言語選好との関係に対する生徒からの回答例である。

この結果から、言語が特定の感情を生み、言語の使い方に影響を与えることがわかる。第一言語の文化のほうが居心地がいいと感じる生徒はその

表3：性格(attributes)と言語に対する選好

	日本語	英語
最も多い	優柔不断、曖昧	率直、直接的、ストレート
	パーソナリティにあっている	要点をストレートに言う
	肯定的な態度にかけている	簡潔
	微妙で曖昧なニュアンスを好む	快活、陽気
	謙遜、見知らぬ人に対して内気	開放的
	明確な意志や意見に欠けている	平易
	他人を傷つけるまたは失敗することに対する恐れ	個性と表現力が強い
	ごまかしたり回避する能力	自己肯定
	引込み思案	性急、短気
	暗黙の了解	意志や意見が明確
	寡黙	
	抽象的	
最も少ない	感情を共有することに対する恐れ	
	上品(refined)	

表4 性格(personal attributes)と言語選好に対する回答例

日本語の方を好む

英語の話者は、日本人は積極的な態度に欠けていると思うかもしれないが、個人的には沈黙を美德とする日本文化が好きだ。
私は自分の心の奥深くにある感情を言葉で表現するのが苦手で、優柔不断にみられる。
失敗を恐れるため、英語を積極的に使えない。
日本語の曖昧で間接的な表現に慣れたら、便利なので、その習慣を変えるのは難しい。
私のパーソナリティは日本文化と発話様式によって形成されたので、変えるのは難しい。
私は日本の背景文化によって影響を受けている。「こんなこと言う資格ないけど」と前置きをしてから自分の意見をいう傾向がある。

英語の方を好む

文化的に適当なので、英語での方が愛情を直接的に表すことができる。
私は日本語では静かで控えめな印象を与えるが、英語では自発的で快活に見える。

感情と言語

英語を話すゲストを接待した後、私たちはお互いに精神的に疲れ果ててしまった。これは国民性の違いによるのかもしれない。日本人にとって疲れる原因となったのは、英語の陽気で自発的な点であり、英語の話者にとって疲れる原因となったのは、言外の感情を読むことを期待されることです。
2つの言語は違って見えるし、感じ方も違う。日本語で話すときは私はまじめで、固く見られる。英語で話す時は、快活で陽気に感じる。

言語の価値観を第2言語へ移入している傾向がある。人が2つの言語で全く異なる感情を持つことは可能である。本研究における生徒からの回答は、感情におけるそのような違いが、個人の性格や行動の違いにつながるかもしれないことを示唆している。回答者が母国語の文化的価値観に対し居心地のよさを感じているということは、文化的に適当な第二言語を習得する上で困難が伴うことを意味する。母国語とその文化に対する安心感、自己表出の仕方、ひいては公的イメージにも影響を与える。

〈結論〉

本稿で得られたデータは、自己の文化的概念が、いかにして異なるコミュニケーション様式につながる強い変数として作用するか、そして言語に関連する感情に強いインパクトを与えるかを示している。今後の比較研究は、異なるまたは対照的な伝達形態と、異なる文化によって共有される基本的な価値観に対する洞察を深めるのに役立つだろう。これらの研究は、我々教育者が生徒のニーズによりよく応えることができるように、文化とコミュニケーションに対する我々の理解を深めるために必要である。

社会文化的レベルでの言語習得の過程に対する我々の理解を高めるのにこれらの知見を活用することが大切である。生徒の自己報告から得られた本稿の予備的・質的な結果を活用することで、今後の研究において、コミュニケーション文化の性質、および英語を外国語として学ぶ生徒の心理的健全さに対する密接な関係を、より詳細に見ることができる。社会言語的能力を獲得する過程を示し、それについての新しい見方を得るために今後、そういった研究が行われることが望まれる。

〈要約〉

自己知覚とコミュニケーションへの文化の影響—外国語における社会言語能力の獲得

文化学習と言語習得に関する多くの研究により、文化学習と言語学習は不可分の関係にあることが主張されてきた。本稿の目的は、外国語として英語を学ぶ生徒からの自己報告を2つの観点から見ることである。1つは、自己知覚に対する外国語の経験と文化のインパクトに対する評価に基づくもので、もう1つは、コミュニケーション様式に影響を与えると生徒が感じる個人的性格、および

片方の言語への選好に対する個人的性格の影響についての自己報告に基づく。この予備的研究は、文化間コミュニケーションおよび外国語の社会言語能力の獲得過程について、今後の研究の準備として行ったものであり、日本人英語学習者に特有の問題について詳述する。

REFERENCES:

- Akasu, K. & Asao K. (1993). *Sociolinguistic factors influencing communication in Japan and the United States*. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Communication in Japan and the United States* (pp. 88–121). Albany, NY: State University of New York Press.
- Bairy, M. (1967). Japanese ways. In R. Ballon (Ed.), *Doing Business in Japan* (p. 24). Tokyo: Tuttle.
- Barnlund, D. C. (1975). *Public and private self in Japan and the United States*. Tokyo: The Simul Press.
- Brown, H. P. (1990). The counter revolution of our time. *Industrial Relations* 29, 1–15.
- Clancy, P. M. (1986). The acquisition of communicative style in Japan. In B. Scheffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gudykunst, W. B. & San Antonio, P. (1993). *Approaches to the Study of Communication in Japan and the United States*. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Communication in Japan and the United States* (pp. 18–48). Albany, NY: State University of New York Press.
- Ide, S. (1982). *Taigu hyogen to danjo-sa no hikaku*. (Taigu hyogen and gender difference). In T. Kunihiro (Ed.), *Nichi-eigo hikaku koza*. Vol. 5, *Bunka no shakai* (Culture and society, Comparative studies series on Japanese and English, Vol. 5). Tokyo: Taishukan Press.
- Iwao, S., & Triandis, H. C. (1993). Validity of auto- and hetero-stereotypes among Japanese and American students. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 24, 428–444.
- Kashima, Y., & Triandis, H. C. (1986). The self-serving bias in attribution as coping strategy : A cross-cultural study. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 17, 83–98.
- Kojima, Y. (1988). *Nihongo no imi, Eigo no imi*. (Meaning of Japanese, meaning of English). Tokyo: Nanundo Press.
- Lebra, T. S. (1993). Culture, Self and Communication in Japan and the United States. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Communication in Japan and the United States* (pp. 51–87). Albany, NY: State University of New York Press.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review* 98, 224–253.
- Maynard, S. K. (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex Press.
- Nabekura, T. (1995). Ibunka communication e no shotai. (Cross-cultural communication: an invitation). In Nabekura T. (Ed.), *Nihonjin no ibunka communication*. (Cross-cultural communication of Japanese). Kitaki Press.
- Radford, M., Mann, L., Ohta, Y., & Nakone, Y. (1993). Differences between Australian and Japanese studies in decisional self-esteem, decision stress, and coping styles. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 24, 284–297.
- Triandis, H. C., Bontempo, R., Villareal, M. J., Asai, M., & Lucca, N. (1988). Individualism and collectivism: Cross-cultural perspectives on self-ingroup relationships. *Journal of Personality and Social Psychology* 54, 323–338.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- Ueda, K. (1972). Sixteen different ways to avoid saying no in Japan. Paper presented at the International Christian University International Communications Conference.
- Yamashita, H. (1986). *Nihonno kotoba to kokoro* (Speech and the heart of Japan). Tokyo: Kodansha Press.

Cultural Influence on Perception of Self and Communication : Acquiring Sociolinguistic Competence in a Foreign Language

ABSTRACT

Studies on cultural learning and language acquisition have claimed that cultural learning and language learning are indispensable to each other. The purpose of this paper is to explore the self-reports of students of English as a foreign language on two levels. The first, is based on assessments of foreign language experience and cultural impact of language on self-perception. The second, is a self report on personal attributes that students feel affect their communicative style and the impact this has on preference of one language over the other. This preliminary study is designed in preparation for subsequent studies on inter-cultural communication and acquisition process of sociolinguistic competence in a foreign language, delineating issues that are specifically pertinent to Japanese learners of English.

Key word: Culture, Self-Perception, Communication